

多読は人をバカにする

——読書の功罪——

読書はそれなりの楽しみもあるが、一面その害も甚だしいものがある。

あるビジネス誌が、読書好きの数名の経営者にインタビューしていた。

「読書は人間的な幅広さを与えてくれる」とか、「読書は人生における最高の知的時間である」とか、「読書は精神修養の武器である」などと読書を礼賛する例が多い。

中には「読書以外に自分の生涯教育を計る道はないし、読書をする者としらない者は40代、50代になると取り返しのつかない大きな差がでる」と語る人もいる。

だが、このような読書至上主義は、わたしにいわせれば、実は精神の貧困を物語るにすぎない。

実のところ、読書は人生にとって必要欠くべからざるものではない。いかに万卷の書を読んでも、愚者は賢人になりえない。いくら多読したところで、自分の頭で咀嚼しなければかえって害になる。読書が何か知的な、教養を深めるかのように感じるのは、大いなる誤解である。単なる自己満足に過ぎない。

——わたしの読書遍歴——

だが、人を批判ばかりしてられない。この点はわたしも^{じくじ}忸怩たるものがある。幼時より多少の孤独癖があったから、読書はわたしの最大の楽しみだった。

小学校高学年になると、『緑のハンイリッヒ』、『モーヌの大將』などの少年名作シリーズに背筋がぞくぞくするような感激を味わった。

中学生になると、アルセーヌ・ルパンやシャーロック・ホームズの探偵小説にはまった。同時に、ロマン・ロランの『魅せられたる魂』の分厚い本を何とか読み通し、夏目漱石の『明暗』、志賀直哉の『暗夜行路』など、意味もよくわからずに読破した。中学校の図書館に入りびたり、殆ど2日に1冊の割合で読み上げた。

中学3年にもなると、さすがに読書に淫する度合いは少なくなったが、山本有三や有島武郎を中心に、余暇のほとんどは読書に割いた。

高校、大学時代は亀井勝一郎、倉田百三、山本周五郎に熱中した他、仏教もかじり果てはアシモフやハミルトンのSFにも手を伸ばした。

こんな風だったから、社会に出てからも多読の癖は改まらず、歴史小説、人生論、比較文化、仏教、ストア哲学を中心に読み続けた。

こうして20代、30代に、仕事に必要な読書以外に、およそ4千冊の本を読んだろう。

この間に読書に費やした時間は、1冊当たり平均3時間とみても1万2千時間（昼も夜も読みまくって500日）の多きにわたる。

人生の最も輝やかな時代に、これだけ膨大な時間を読書に費やして、わたしが得たものは何だったか？

エピクテトスの『人生談義』、マルクス・アウレリウスの『自省録』、モンテーニュの『随想録』など、数冊の「1冊の本」に巡り会っただけである。

心を許しあえる友人に巡り会うのは、人脈づくりの結果ではなく、全く偶然の出会いからである。同様に、わたしがこれらの「1冊の本」に巡り会ったのは、決して多読の結果ではなかった。わたしが読書好きでなかったとしても、いずれにせよこれらの本には巡り会ったであろう。

——活字中毒を反省する——

1万2千時間を他のことに費やしておれば、もっと人生を豊かにできたはずである。

『西欧人生論の研究』に集中しておれば、アマチュアとはいえ数冊の著作を発表できたろう。ピアノや絵画や溪流釣りの趣味にでも時間を割いていれば、人生を豊かにするには十分の技量に達していたであろう。

ドイツ語、フランス語習得のために時間を費やしていたら、日常会話には困らないレベルに達していただろう。要するに、もっと多彩で豊かな人生を楽しめたと思える。

実に恥ずかしい話だが、当時わたしは自分の多読癖に気づいていなかった。読書はわたしの日常生活の一部だった。通勤かばんの中には、分野の異なる数冊の文庫本が入っているのが常だった。

風呂に入りながら、ビニール・カバーをかぶせた文庫本を読んでいるわたしを見て、新婚早々の妻が呆れ果てたことがある。わたしの方は逆に、妻が驚いたのを見て、自分の異常さを初めて悟った。

わたしは漫然と、「読書は教養を高める」と思っていたが、その実わたしは活字中毒だったにすぎない。電車の中で、風呂の中で、ぼんやりと放心の一時を持つ心の余裕もなく、常に何かをしていないことには不安でたまらなかったのだ。

読書というものは、人生を豊かにおくる多くの手段のうちの一つにすぎない。人生は短い。読書のために過大な時間を費やすことは、他に費やすことのできた時間を犠牲にしていることに他ならない。

それだけにとどまらない。多読に淫すれば、教養人・有識者にしばしば見られるように、人の考えを受け売りするコピー機に堕しかねない。「自ら考える能力」さえ失ってしまう。

——モンテーニュの知恵の源泉——

読書は単なる気晴らしである。読書は人を賢明にもしなれば幸福にもしない。モンテーニュもショーペンハウアーもそう喝破する。

モンテーニュは、若い頃はたいそうな読書家であったが、現代人に比べると、彼が読書家といえるかどうかは疑問である。

モンテーニュの蔵書は約一千冊であったという。そのうちの多くは友人の遺した書物であり、モンテーニュが自ら集めた蔵書は精々数百冊であったろう。当時の印刷技術からすれば、モンテーニュの蔵書が少ないのも当然である。

現代ではちょっとした読書家は数千冊から4～5万冊の蔵書を持つ人も珍しくはないが、モンテーニュの時代では考えられないことである。

モンテーニュは遠視の気味があった。そのせいか、若い頃は1時間と続けて本を読むことができなかつたらしい。カエサルの『ガリア征討記』を読了するのに、5ヶ月もかかっている。

私の目は、夏のかつとした明るい光に耐えられない。若いころでさえ、私は紙の白さを弱めるために、書物の上にガラス板を置いた。

モンテーニュは、40代半ばに、読書係を雇い書物を読ませていたが、読書係の読み方が下手で、いらいらしたらしい。生来の遠視もあって、モンテーニュは読書が苦手だった。さらに、50歳を過ぎてから、白内障が進んだ。

読書の楽しみも、ご多分にもれず長所ばかりというわけではない。いやかなり大きな欠点を有している。精神は鍛えられるけれども、肉体の方は読書の間活動を止め、弱り衰える。私にとってこれほど有害な一特に老衰に向かう時代にとって一避けなければならないことはない。

だから彼は読書より対話を重視する。

我々の精神を鍛錬する、最も有効な方法は対話である。私は対話することが、人生の他のいかなる行為より楽しいと思う。

だから、どちらかを選ばなければならないなら、私は耳や舌よりも寧ろ目を失うことに賛成する。読書は活気のない行為で人を興奮させることがないが、対話は我々を鍛える。

モンテーニュは、読書の効用と限界を十分知っていた。彼は読書よりも耳学問を重視した。モンテーニュ家には、多くの文化人や学者が出入りした。彼はこれらの人々との対話を楽しただけでなく、近所のお百姓や、大工や、老婆をつかまえて話し込んだ。そうして多くの耳学問をした。彼にとっては対話が知恵の源泉だった。

——多読は害悪である——

モンテーニュは建前としては中庸を旨とする人だから、読書に対する批判もまだまだ抑制的である。だが、毒舌で有名なショーペンハウアーともなると、読書への批判は極めて厳しい。

「読書とは、自分の頭ではなく他人の頭で考えることだ」と彼はいう。

読書により他人の思想が流れ込むことは、自分で考える人にとってこれほど有害なことはない。書物から読み取った他人の思想は、他人の食べ残し、知らない客の脱ぎ捨てた着物に過ぎない。

彼の読書に対する批判は、止まるところを知らない。

我々が読書する際は、他の人が我々に代わって考えている。我々は、ただその人の考えの過程を反復するに止まる。ちょうど習字の際に、先生が下書きしてくれ

た字のあとをペンで辿るとかわらない。

非常に多読する人、一日中読書に明け暮れて、何も考えないような人は次第に自分で考える能力を失っていく—いつも馬にばかり乗る人が、遂には歩くことを忘れるようなものである。多くの学者の場合がそれで、彼らは読書によって馬鹿になったのだ。

彼にとっては、ローマの博物学者大プリニウスさえ多読に害された凡人に過ぎない。

大プリニウスは、食事中であろうと旅行中であろうと、風呂に入ったときでさえ、しょっちゅう読書を止めず、或いは人に読んで聞かせてもらったという話が伝えられている。

こんな話を聞くと、この男には自分自身の思想に大きな欠陥があったため、ひっきりなしに他人の思想を注ぎ込む必要があったのではないか、という疑問が浮かんでくるのだ。彼の無批判な軽信や、なんともいえずいやらしく、わかりにくく、紙を節約したような文体からも、彼を尊重する気になれない。

「多読は害悪である」とショーペンハウアーはいう。バネに絶えず重いものを乗せておくと弾力がなくなるように、多読によって他人の思想を外部から強制的に注入することで、精神の弾力性が失われる。博識多読は、多くの人をその天性以上に平凡、愚鈍にする。

最後に自戒を込めて、ショーペンハウアーの言葉をもう一言。

自分自身の思想をもたないための、一番確実な方法は、暇があればすぐ読書することだ。

(モンテーニュの引用は関根秀雄訳『随想録』による。ショーペンハウアーの引用は秋山英夫訳『随感録』を参考とした。)